

草津市立矢倉小学校通信 令和2年7月1日 NO.6



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

正しく恐れる

「正しく恐れる」とは、コロナ禍で登場してきたキーワードだ。何かにおびえ、怖がるばかりで一向に事態が好転しない。そうこうするうち、健康、メンタル、いのちをむしばんでしまう。これを救ってくれるキーワード。これだけがんばったのにやられてしまうばかりでは、たまったものでない。

「正しく恐れる」ことをめぐっては、言うところの「正しさ」が、人によって、ちがったものになるからややこしい。日々、くらしている場がどのようなものかによっても大きく影響をうける。とりわけ日ごろのつきあい、時間の使い方など、自分らしさをどのようにして打ち出し、塗りかえ続けようとしているかに左右される。

「正しく恐れる」にあたっての最重要課題は、ウィルスが体内に入ろうとしたとき、どれほど抑止できるかだ。手洗いやマスクの感染防止に細心の注意がむけられていて、睡眠と栄養のバランスと体力がしっかりそなわり、私たち人間のもつ免疫力がしっかりしていれば、相当な抑止効果が出るという。ここではマスクがブランド品かどうか、使い捨てなのかどうかは、さほど関係ないはずなのだが、実際はお気に入りのマスクで用心していきたいし、栄養のバランスというより自分の好みの物を食していきたいし、それ以上にこうした取り組みをしている自分のことを周囲からすごいなあと認められていたい。

「正しく恐れる」ことは、コロナ問題に限らないように思えることがあった。私のような「若い」と闘わねばならない、ほどよいお年頃？ともなれば、何かにつけて若返りの秘策にうちこみ、結果、血糖値がどうだとか、肉体年齢がどうだとかが話題に上る。そうこうするうち、休日はチャンスがあれば体を動かさねばならないという強迫観念にかられている。人それぞれの事情があり、これこそ重要な前提条件であるにもかかわらず。若い頃は、カッコよさにふりまわされた。しかし、自分がどれほどのものか、どのようにしていくことが自分らしさにつながるのかが、なかなかみつからずに、もがいてしまう。子どもから大人へ成長するにあたっては、自分らしさを求め、もがき続けることが大切で、ありのままの自分がそっくりそのまま受け入れられたとき、それなりの生き方ができるようになれるものだから…といてしまえば簡単なことなのだが、当の本人、本人を取り巻く大人たちにとっては乗り越えるべきすばらしくも苦しい営みとなる。「しょせん、おまえはわたしらの子やから。」という亡き父からの語りやすなおに受け入れることができ、顔を見合わせ大笑いしたときのこと、「人は二度この世に生まれる。一度目は存在するため。二度目は生きるために。」哲学者ルソーの言葉に出会い、腑に落ちたときのことか思い起こされる。

「正しく恐れる」とは、何を拒み、何を受け入れるのか見極めていくことなのか、耳を澄ましてものごとをじっくり見つめたいものだ。健康であること、美しいこと、はやっているかどうかなど、何が正しくて、何に惑わされてはならないのかについては、頭でわかっている、なかなかできず、もどかしさを感じてしまう。それは他者ととも生きていかざるを得ない我々人間のもつ強みでもあり、弱さだろう。たとえば体力づくり。何か一つのことを一生懸命取り組むことは、たしかにすばらしい。しかし、それは命あつての物种だ。「健康は何をおいても第一だ！健康のためになら命の一つや二つ！！」校長室にやってくる一年生の子どもたちに言ったとたん、心配そうに「だいじょうぶ？」と返された。

「正しく恐れる」ことも、こうなると「ほどほどに…」となるようだ。 校長 大林道範